

澁谷由里『馬賊で見る「満洲」 ——張作霖のあゆんだ道——』

上田貴子

1

日本植民地史研究としての「満洲」研究は、厚い蓄積があり、多くの読者の目に触れている。他方、当該地域を中国の一部としてとらえた研究についても、研究蓄積があるが、前者に比べるとその成果が一般読者の目にふれる機会は少なかった。この点で、著者が本書を上梓されたことの意義は大変大きい。中国の一部としての「満洲」をとらえることは、「満洲」誤解、ひいては中国誤解を解く糸口の一つといえる。この誤解には二つの面がある。一つは日本が戦前支配していたために形成された「満洲」イメージから来る誤解であり、もう一つは独自の地域的特色を持つ「満洲」という地域が中国の一部であり、このような個性ある諸地域からなる中国が多様性をもっていることに気づかないということからくる誤解である。本書は、「馬賊」と張作霖をとりあげること、前者の誤解を解こうとし、この個性ある「満洲」が中国の一部であることを前提として議論することで、中国の多様性への再認識を促しうるものである。

この「満洲」誤解に連なるものとして、張作霖評価がある。日本からは「馬賊」出身であり、日本の傀儡であったとみられ、中国でも李大釗を殺害するなど反革命的存在とみられ、低く評価されがちである。他方、息子張学良は、日本に抵抗し、西安事件によって蔣介石に国共合作を促したとして、評価が高い。このような既存のイメージに対し、張学良のありかたは張作霖の存在なくしてありえず、ここから考えて、従来の張作霖評価は妥当とはいえないのではないかと、張作霖像は誤解されているのではないかという問いから、本書は書き起こされる。

張作霖誤解を解く糸口として、まず「馬賊」イメージのあやまりが指摘される。日本軍が「馬賊」に対してあやまったイメージを持ってしまったのは、日露戦争、第一次満蒙独立運動、第二次満蒙独立運動で「馬賊」を利用した経験から、「馬賊、御しやすし」というイメージができてしまったためとする。

ここから、本書は「馬賊」と張作霖政権の発展について書き進められ、各章も「馬

賊」を扱ったものと張作霖政権を扱ったものに大別できる。「馬賊」に焦点が当てられている第1章「馬賊」はなぜ現れたのか?」では「馬賊」が「満洲」に出現した背景を説明し、第4章「日本人と「馬賊」」においては、「馬賊」と接触経験を持つ日本人の手記をもとに、馬賊の多様性を示している。張作霖政権をとりあげた部分のうち、第2章「張作霖登場」では第1章をうけ「馬賊」の一例として張作霖をとりあげながら、彼がほかの「馬賊」とは違い成功する過程を説明し、第3章「王永江と内政改革」では、張作霖が奉天政権を掌握した際に民政部門を担当した王永江をとりあげ、地域政権が確立される過程と張作霖政権の限界が描かれている。

ただこの構成において惜しむらくは、本書全体は「満洲」を地域社会からとらえるという視角に貫かれているものの、「馬賊」をとりあげる部分と張作霖政権をとりあげる部分がやや乖離している印象をうける点である。著者自身の張作霖政権に関する仕事およびその方法論と、近年新たに組み込まれた「馬賊」に関する部分の方法論の違いが、両者の叙述の違いになっているように思われる。それは前者では一次史料や調査報告書を多く用い、後者では回顧録など口述史料を多用せざるをえない点があったことにも一因があるだろう。

2

以下、本書の内容に即して主な論点を抽出しておきたい。まず、「馬賊」の原型は現在の内モンゴル自治区や新疆ウイグル自治区で、乾隆期ごろにはすでにみられた、平原で馬を駆って活動する盗賊であるとする。このような原型「馬賊」の規模は小さく、リーダーおよび指導者層の数人のみが騎馬であり、それ以外は徒歩で活動し、一つの「むら」や「まち」を拠点とし、その周辺を勢力下においている。「満洲」の「馬賊」の場合は馬にのり銃を背負った姿の写真によってイメージが作られており、写真と銃という道具がなければ成立しえないことから、これが近代でなければありえない「馬賊」の姿であることが指摘される。永井リサ氏によれば、元来内モンゴルに隣接するため馬の保有量が高かった「満洲」において、清末期さらに馬が手に入り易くなった背景としては、遼寧省西部から内モンゴル地域にかけての広大な地域に設けられていた、清朝の官営牧場(牧廠)が清末に廃止されたことにより、大量の官馬が民間に売却され流通していたことが挙げられるという¹。この点でも「満洲」における「馬賊」は近代の産物であることがわかる。

¹ 東北アジア地域史研究会大会報告 永井リサ「満洲」における馬車輸送システムの成立過程—張作霖政権を中心に— 2004年12月4日、九州大学。

「馬賊」は馬を飼い、装備を整えるための資金源を必要とした。略奪から資金を得る姿がイメージされやすいが、それが活動の中心ではなかった。むしろ地域の名望家地主層との間に契約をむすびスポンサーを得て、その地域社会の治安維持を請け負った。これが「保険隊」と呼ばれるようになる。防衛される地域にとっては「保険隊」であるが、それ以外の地域にとっては襲撃してくる可能性のある「馬賊」であった。

清末という時代は「馬賊」が防衛を依頼された地盤に立脚するだけで終わらず、上昇志向を持ったときに、政権とアクセスするルートを成立させていた。これが張作霖のような存在を生み出す歴史的条件といえる。当該時期、軍隊の人員およびその経費を現地調達することが認められ、地域でリクルートされた兵士は新軍に組織された。つまり既存の武装集団を帰順させることにより、新軍に組み込むことが可能になった。これが「馬賊」が政権にアクセスするルートとなり、政権は帰順「馬賊」を使って「馬賊」討伐をさせた。帰順「馬賊」は従来どおりのスポンサーから資金援助をうけており、政権側としては軍事費の削減にもなった。この結果、20世紀になると「馬賊」の淘汰と再編が行なわれていった。張作霖がこの淘汰のなかを生き残り、辛亥革命の頃には、政権は彼の軍事力を無視できなくなっていた。

他の「馬賊」と違い張作霖が成功した理由を、本書では「満洲」を舞台にした国際情勢とそれに連動した国内政治の変動を、長期的視野で正確に読みとった点にあるとする。

辛亥革命における身の振り方はその一例といえる。革命派は「満洲」において「馬賊」を「革命」に動員することを考えていた。辛亥革命時期、藍天蔚をはじめとする革命派の軍人が「満洲」に派遣された北洋軍の協統（旅団長）をつとめ、武昌蜂起に呼応して軍事行動をおこした。一部の「馬賊」はこれに呼応し、新軍内の帰順「馬賊」も革命派の指導下で動員されることが期待されていた。しかし、張作霖は革命派の呼びかけには応じず、東三省総督趙爾巽の命令に従い、奉天に入城して城内の治安維持にあたった。この結果、趙爾巽は自由に動かすことができる軍隊として、張作霖の軍事力を活用すると同時に、蜂起の報を得てすぐに対処した情報統制により、革命派を押さえ込むことに成功した。他方、これをきっかけに、張作霖率いる部隊は陸軍第27師団に改編され、張作霖自身、師団長陸軍中將に任命され奉天に駐屯することになった。

辛亥革命後、袁世凱は奉天都督として腹心の段芝貴を派遣したが、張作霖は「奉天治奉」のローガンをかかげ、袁世凱の帝政失敗と死去に乗じて段芝貴を追放し、奉天政権を完全に掌握した。これが所謂奉天「軍閥」、張作霖政権の誕生となる。

この転身の過程で、情勢を読むことができた点もさることながら、それを助けた地域社会内の文治派と協力関係を獲得していったことも、張作霖と他の「馬賊」が一線を画している点である。

地域社会内の文治派とは、清王朝が安定していた時期であれば、科挙による中央政

界への進出を目指すような地域有力者で、奉天地域行政にかかわるようになった人々である。日清戦争、義和団事件、日露戦争を経て混乱した地域社会の安定を図る必要性があったこと、洋務運動および光緒新政により地方裁量の幅が増えたことによって彼らは積極的に地域行政に参加した。辛亥革命時に張作霖を起用することを趙爾巽に働きかけ、その後の段芝貴追放にも奉天文治派の一人である袁金鎧がかかわっている。また張作霖が政権掌握後、財務行政を担当した王永江もその一人である。

これら文治派は遼陽を中心に勢力を拡大した。遼河の西の地域では「馬賊」出身の「保険隊」が活躍したが、遼陽のような清初以来の歴史を有し、経済的にも一定レベルの発展がみられた地域では、名望家層が郷団を組織して地域防衛を行っていた。これが地方行政に組み込まれるなかで、警察行政へと発展した。張作霖との協力関係が成立するようになると、軍事は張作霖に行財政は文治派にという分業がなりたち、奉天地方政権内での役割分担が形成された。

このなかでも特に王永江は清末以来すすめられた地方財政の健全化をはかり、奉天「軍閥」成功を財政面で支えた。

しかし両者の協力関係にも限界があった。地域社会の安定を第一とする王永江に対し、張作霖は勢力拡大を意識し、奉天省から東三省全域へ支配地域を拡大し、1924年に第二次奉直戦争に勝利し北京政権を奪取すると、中華民国北京政府の中央政府としての地盤を確保する政治的軍事的課題にとりくむこととなった。しかし、東北地域内の財政基盤が貧弱なまま、中央政府を担うことは日本など外部への依存を高めることにもなり、王永江は中央政府への進出に反対していた。最終的に王永江は、1926年1月郭松齡事件後の善後会議における軍事費縮小の提案が受け容れられなかった段階で、政界から身を引いた。

本書では、張作霖が日本の傀儡であったという誤解に対する反証が紹介されている。このうち1. 依存体質の借款を行なわなかったこと、2. 幣制統一を図ろうとしたこと、3. 中国側鉄道を敷設しようとしたこと、について説明を加えておこう。まず、借款についてであるが、王永江が奉天省財政再建を担当するようになると、彼は日本から資金援助を受けるが、これを短期借款で行なっている。これは長期的な負債を負い、不利な立場に身を置くというよりも、返済の目途がある形で借款を導入し、日本への過剰な依存を避けることになった。次に、幣制統一の場合は、私帖やロシア・日本系の銀行券が混在する通貨状況を、奉天票を基本とする通貨制度に整備していった。当時、金票と呼ばれた朝鮮銀行券はある程度の価値を持つてはいても、流通量としては奉天票を基準とした通貨が地域市場におけるスタンダードであった。第三に、鉄道については、民間の資金を集め、奉海鉄道を敷設することによって、満鉄一辺倒の奉天の鉄道運輸を切り崩していった。これらを実行するなかで、日本側との折衝が不可欠になるが、日本を利用しつつ上記の政策を可能にできたのも、王永江の手腕であるとしている。それゆえ、王永江の下野以降日本と張作霖との関係も矛盾をはらんだものとなり、関東軍による張作霖爆殺という極端な結果をもた

らしたと考察している。

以上が本書がメインに据える「馬賊」成立の背景と「馬賊」から政権を形成した張作霖についての議論である。このほかに、日本人の手記にあらわれる、張作霖とは違うタイプの「馬賊」について言及されている。ひとつは、満蒙独立運動に参加したモンゴル族「馬賊」である。満蒙独立運動には、中国内政に干渉しようとする意図から日本による支援があった。このほかのタイプとしては、中国朝鮮国境付近の森林地帯で活動し木材伐採と運搬に利権を持つものである。著者はこれを「馬賊」というより伐木業に利権をもつ土豪のようなものであろうと判断している。

「馬賊」のなかからの成功者である張作霖が軍を掌握すると、これ以外の軍事勢力には上昇の余地はなくなった。民国期の「馬賊」匪賊は、在地社会に基盤を置いたまま、官界に出てこない軍事力をもった集団となった。彼らの規模は拡大し、吉林省や黒竜江省にも分布しているが、中央への上昇志向をもたず、メンバーに無頼の徒が増えていく。「満洲国」期になるとこれらは、「満洲国」政権に帰順するものもあったが、抗日義勇軍に参加したケースも多い。特に、中朝国境地域では、抗日活動が盛んであった。

本書では「馬賊」を「満洲」の申し子と位置づけ、次のように説明する。近代的な意味での司法も社会福祉も機能していない当時の「満洲」社会にあっては、非農業人口のうち、法にふれた者、貧しい者などが身を寄せ合って暮らすための共同体的組織が必要であった。これが「馬賊」であり、この点で「満洲」社会の底辺層を救う機能を有している。また、「馬賊」や匪賊が「満洲国」期の抗日勢力となったことも、この役割の延長においてとらえられている。

以上のように、地域社会からみた「馬賊」そして張作霖という視点による本書の内容は、一般に流布している張作霖イメージが冒頭で触れた二つの誤解にあることを読者に知らせることに成功しているといえる。

3

以上のような本書の内容にもとづき、評者の関心から、二点にしぼってコメントしておきたい。第一は、「満洲」経済における公的な財政ではとらえられない側面についてである。本書では、張作霖政権の成功の一因として、王永江の努力による財政の健全化をとりあげている。しかし、張作霖を中心とした集団の経済基盤には公的な財政に現れない部分がある。それは大豆経済に立脚した権力であり、大豆取引による利益を、再配分する存在であった点である。

著者は張作霖政権期の東三省財政が軍事費に圧迫されたことによって、産業への投資が不十分であったことを指摘している。しかし、当時の東三省には張作霖をはじめ

めとして、政権関係者が資本主をつとめる資本が存在した。当初は大豆取引によって利益をあげる糧棧が中心であったが、そこで蓄積された資金は1920年代にはマッチ、ビール、紡績業などの軽工業へ投資された。つまり、財政とは別に半官営の資本があり、その利潤によって、新しい産業への投資が行われていた。公的資金が軍事費ではなく産業育成に支出されたとすれば、さらなる産業の発展が期待されたかもしれないが、それがなくても近代化をはかりうる、財政とは別ルートで権力者の意向を汲み、産業に投資される資金の流れが存在していた。

この大豆経済が発達するための条件に鉄道の存在がある。実際には、ロシアが、シベリアでの経験を生かし「満洲」における鉄道の基礎を築いた。日本の満鉄による南満の開発もこれを引継ぎ展開させたものである。最終的には中国側資本においても、張作霖政権はさきに述べたように大豆取引で得た資金によって工業育成と鉄道開発を行っていった。このような大規模開発とその後の資本投資を、著者は「国家」主導の資本主義としている。広大なフロンティアである「満洲」を短期間で開発するには大規模資本の投下、「国家」主導型の資本主義が避けられない。この開発の中心はロシアから日本へと移行し、20年代末には、日本から中国へと移行しつつあった。先に述べた財政とは別ルートの資金の流れは、このようなロシアや日本の「国家」主導の開発によって整えられたインフラを必要条件として成長したが、一旦形成されると、中国側の「国家」主導の開発の実現、開発の中心が中国へと移行することを支えるものとなった。

第二に、本書は「馬賊」にかかわった日本人が残した記録を再構成しながら「馬賊」の実態に迫り、「馬賊」や張作霖に対する一般的なイメージが偏ったものであることが明らかにしているが、著者が提示したのも、当時の日本人の目からみた「馬賊」像のひとつであったことを指摘しておきたい。著者がとった方法が「馬賊」像、張作霖像の再考に有効である点は疑いないが、これは、使われた資料が今まであまり評価されておらず、ここに書かれたような体験をした日本人の存在が、一般には知られてこなかったということの裏返しである。

「馬賊」経験に限らず、日本人の「満洲」経験は本来かなり多様なはずである。そのうちのどれだけが、現在日本人が持つ「満洲」像や中国像に還元されているだろうか。終戦後の引揚は「苦難の引揚」ばかりではなかったし、奉天やハルビンの中国人街で中国人相手に商売を行い、引揚げをためらった人、引揚げなかった人も存在する。また日本人「馬賊」に限らず、いわゆる大陸浪人と呼ばれた人々の経験も埋もれたままにされているといえよう。このように傍流に追いやられ、忘れられつつある経験の多くは、中国社会と積極的に交わった経験であり、それが改めて歴史のなかに位置づけられる必要があるのではないだろうか。

最後に、本書をきっかけとして、現在の日本における「満洲」および中国に対するイ

メージになんらかの影響が与えられることを期待したい（講談社選書メチエ，2004年12月，242p，1600円＋税）。

（うえだ たかこ・近畿大学）